

平成 29 年 2 月 2 日
V I A X 児童部会

平成 28 年度 第 5 回「基本図書から学ぶ」報告書

1. 日時 平成 29 年 1 月 20 日（金） 14：00～16：00
2. 場所 ヴィアックス研修センター（鳩山ビル 6 階）
3. 参加者 15 名
4. 配布資料①紹介文まとめ『クワガタクワジ物語』
②紹介文まとめ『パンダの手には、かくされたひみつがあった！』
③紹介文のまとめ『本はこうしてつくられる』
④28 年度第 5 回児童部会「基本図書から学ぶ」ノンフィクション 資料
5. 課題本
『クワガタクワジ物語』
（中島みち作 中島太郎絵 偕成社 1974）
『パンダの手には、かくされたひみつがあった！』
（山本省三作 喜多村武絵 遠藤秀紀監修 くもん出版 2007）
『本はこうしてつくられる』
（アリキ作 松岡享子訳 日本エディタースクール出版部 1991）
6. 内容
 - (1) 事務局より以下の点について、説明があった
 - ① ノンフィクションのレビュー・スリップの書き方の注意点について
 - ② ノンフィクションを評価する時の観点について（配布資料④参照）
 - (2) 5 つの班に分かれ、課題本 3 冊について、<子ども達がどのように楽しむか>を話し合い、発表を行った。以下、各グループの発表内容である。

『クワガタクワジ物語』

A班

- ・ 物語形式で感情移入しやすい
- ・ 主人公が作者の息子であり、実体験をもとに書かれており、虫好きな子たちは共感を得て、虫に関心のない子たちも興味をもつことができる
- ・ 挿絵を主人公である太郎くんが描いていて、作品に合致している
- ・ 飼育の失敗談なども書かれており、実際に飼育する際の参考になる

B班

- ・ 180ページあって読み応えのある内容で、虫好きな子に相応しい
- ・ 物語としても、観察日記としても楽しめる
- ・ 失敗も含め、事実がしっかりと書いてある
- ・ 物語形式なので、絵本やフィクションから移行しやすい

C班

- ・ 虫好きな子は、好きになる本
- ・ 昆虫の生死を扱っている本であるが、お母さんの姿に安心感がある
- ・ 試行錯誤をしながら育てている姿を見て、自分でも飼育してみたいくなる
- ・ クワガタを性格付けしており、それらに愛着がわく
- ・ 巻頭にクワガタの実物の写真があるのもよい

D班

- ・ 経験に基づいて書かれており、読みやすい
- ・ 親子で一緒に飼育する姿は、最後まで興味をひく
- ・ 虫の特性の違いなど詳細に述べており、専門性がある
- ・ 感情移入しやすい描き方になっている

E班

- ・ 虫が嫌いな子どもでも新しい発見があり、育ててみたいくなる
- ・ 日本では見ることのできないクワガタの写真もあり、虫好きにはうれしい
- ・ 真夜中の昆虫採集や、離島への採集旅行など、羨ましく感じる
- ・ 育てる楽しさを描くだけでなく、失敗もあり、それを通して成長がみられる
- ・ 文学作品としても楽しむことができる

『パンダの手には、かくされたひみつがあった！』

A班

- ・ 絵にインパクトがあって、図解もわかりやすい
- ・ 難しい言葉がなく、漢字にはルビがふってあるので、小学校低学年にも勧められる
- ・ 監修者が主人公として、新しい発見をしていく過程が簡潔に書かれている

B 班

- ・ 身近な例えから導入しているところがとてもよい
- ・ 当たり前と思っていることが、不思議なことだと気づく視点を与えてくれる
- ・ 上野動物園で発見されたこと、そして骨格標本が国立科学博物館あることなど具体的な場所が書かれていて親しみを感じる
- ・ シリーズの他の本も読みたくなる

C 班

- ・ 人間とサル以外にモノを握る動物がいることをパンダが笹を食べている姿から追及していく過程が興味深い
- ・ 専門的な内容であるが、絵本なので読みやすい
- ・ 身近な疑問が世界的な発見につながっていることを知って、子どもたちの探求心を刺激する
- ・ 国立科学博物館に骨格標本があると書かれているので、見に行ってみたくなる

D 班

- ・ なぜパンダは笹を持てるのか、という着眼点がよい
- ・ なぜパンダが笹の葉を食べるのかの秘密もわかる
- ・ 定説を自分で確かめようとする姿勢に、未来へのメッセージが含まれている

E 班

- ・ 当たり前だのことが、当たり前ではないという視点をもつことの大切さを教えている
- ・ 切り絵の手法をとった絵が、遠藤さんの研究の過程をわかりやすく伝えている
- ・ わからないと思ったことを、自分の目で確かめようとした遠藤さんの動物学者としての研究に興味をわく

『本はこうしてつくられる』

A 班

- ・ 全ページカラーで取っつきやすい
- ・ カバー見返し（裏側）に実際の校閲過程を見せていて興味をひく
- ・ マンガの吹き出しを使って、細かく書かれていて、本の編集に興味をひく
- ・ 編集の専門用語が使われていて、漢字にルビがないので対象年齢の判断が難しい

B 班

- ・ 現実的な内容で、かわいい印象の表紙と中身のギャップがある
- ・ マンガのコマ割り手法が取られており、読んでいて飽きさせない
- ・ 印刷機の構造など、説明が細かく面白いが、読み手によっては難しく、理解がわかれそう

C 班

- ・ 絵本の形式をとっているが、内容は専門的で難しい
- ・ 難しい内容である一方で、猫が擬人化されており、可愛らしさに惹かれて愛着がわく
- ・ フロッピーディスク、タイプライターなど現在使われなくなったものがある
- ・ ふりがながないが、親子で読むとよい本としてすすめたい

D 班

- ・ 絵本にしてはボリュームがあり、専門性が高い。知らないことが多いことに気づく
- ・ 本を作るのに、これほど多くの人関わっていることを初めて知った
- ・ 時代に合わない部分があるが、本を作るという過程がよくわかる

E 班

- ・ 専門的用語が使われ、難しい内容だが、小さな子どもでも本を作るのにたくさんの人が関わっていることを知ることができる
- ・ コマ割りをじっくり見ていくと、様々な発見があって面白い（例：主人公の後方に描かれているカレンダーから時間の経過を知ることができる）
- ・ 本が、本を書く人だけではなく、多くの人たちが協力して作り上げることを知り、協力しながらひとつのモノを作り上げる楽しさを知り、仕事に対する興味がわく

(3) 班ごとに担当する本について、各自が作成した紹介文の良い点を確認したうえで、紹介文を作成した。以下、各班が作成した紹介文である。

A 班『クワガタクワジ物語』紹介文

この物語は小学 2 年生の太郎君が生まれてはじめて、それも一度に 3 匹ものクワガタ虫を捕まえたところから始まります。飼育中には様々な出来事が起こりますが、主人公はそのたびに考え、成長していきます。

昆虫を捕まえた時の興奮や、熱心に飼っている様子が、とてもよく伝わってきて、読み手をひきつけます。また命のはかなさや尊さも感じることができます。

著者の息子の太郎君が中学生になって描いた挿し絵や、昆虫写真家として著名な海野和夫さんの写真が物語の理解度を深めてくれます。

虫好きな子どもは共感しやすく、あまり興味のない子どもでも関心を持つきっかけとなる本です。飼育の体験記録と物語の楽しさを兼ね備えた一冊です。ぜひ読んでみてください。

B班『クワガタクワジ物語』紹介文

この本は、3年の夏を過ごしたクワガタと少年・太郎君、そして著者である中島みちさんの記録です。小学2年生の太郎君が初めてクワガタを捕まえて飼育する3年間の様子と、それを見守るおとなの思いがまっすぐに伝わってきます。虫同士の縄張り争いや、世話をさぼったことでクワガタを死なせてしまうなど、観察日記としての読み方もできます。そして3年目の夏には、最後まで生きていたクワジが死んでしまい、母親のみちさんもガンという病気になってしまいます。命の大切さや、尊さにも触れているこの作品は、クワガタたちの生態と、それを見守った親子の成長記録でもあります。挿し絵は、中学生になった著者の息子の太郎君が描いています。写真も豊富で、クワガタのことが詳しく知ることができ、クワガタ好きな子におすすめです。また虫が苦手な子も、この本を読むといつのまにか、きっとクワガタのクワジの懸命に生きる姿に引き込まれていることでしょう。

C班『パンダの手には、かくされたひみつがあった！』紹介文

ヒトやサルの間のように、親指を動かして物を握ることができる動物はとても少ないのです。犬や猫もよく見ると物を握っていないことがわかります。そんな中でパンダは数少ない物を握ることのできる動物です。

「パンダが竹を握ることができるのはなぜだろう」と、動物学者たちはその秘密を解き明かそうと挑んできました。国立科学博物館に勤めていた遠藤秀紀さんもその一人でした。

この本は、遠藤さんがパンダの体を解剖し、その謎を解き明かしていく様子を、小さな子にもわかりやすく絵本の形で紹介しています。大きくカラフルな絵と、語りかけるような文章が、子どもたちを動物学研究の世界へと誘います。

シリーズには他に『すごい目玉を持ったアザランがいる！』、『ゾウの長い鼻には、おどろきのわけがある！』、『アライグマの口のなぞが、ついにとけた！』の四作（いずれも遠藤秀紀監修）があります。

D班『本はこうしてつくられる』紹介文

この本は、本の制作の全過程と全ての関係する職業が紹介されています。本の制作には、作家や画家だけでなく、編集者、校正者、印刷関係者、販売関係者など多くの人が関わっています。その人たちの仕事内容がどのようなものかを知ることができます。その過程が軽やかなイラストで丁寧に描かれてあり、漫画のようなカット割なので、とても読みやすく楽しめます。また漢字が多く、説明書きがあるとはいえ専門用語も多いので、本に興味のあるお子さんはもちろん、おとなのかたにも驚きと発見があるでしょう。

現在の出版までの過程や方法は、この本に描かれているものとは多少変わっていますが、本の制作についての全てを知ることができ、作り手の本に対する愛情も伝わり、さらに親しみがわくでしょう。

本を印刷する過程の中に、一枚の紙にどのように割り付けて印刷するかを、図解であらわしている箇所があります。これを参考に、親子でぜひオリジナル絵本を作ってみてください。

E 班『本はこうしてつくられる』紹介文

本はだれが作っているのでしょうか？おはなしを作った人？絵を描いた人？本を印刷した人？そのどれもが正解です。1冊の本が作られて私たちの手元に届くまでには、様々な職業の人々との関わりや協力があることが、この本を読めばわかります。本が好きな猫くんと一緒に本作りの世界をのぞいてみましょう。

一見、かわいらしい絵本のように見えますが、開いてみると内容はとても専門的。本作りの工程がひとつひとつ詳しく描かれています。中には専門用語も出てきますが、文章にすると難しい工程もイラストや吹き出しを効果的に使うことで、わかりやすく説明しています。子どもだけではなく大人が読んで面白く、じっくりと何度も読むことで、より理解を深めることができる1冊です。

本が好きな子どもは、大好きな本が出来上がっていく工程を知ることができ、本に係る仕事がしたいなと思っている子どもには、職業選択の幅が広がっていくことでしょう。

7. 所感

- ・ノンフィクションの作品の紹介は、これまでと着目点が異なることもあり、紹介の仕方が難しく感じられた。
- ・グループで評価の観点などを確認し、皆で話し合うことにより理解が深まったように思う。
- ・情報の新しさ、著者とテーマの関係について、重要性を感じた。
- ・知識の本は、古くから読み継がれている本が情報の正確さという点で更新が行われてない場合があり、どう評価するか迷った。
- ・子どもに知識を与えるだけでなく、そのことの本質をわかりやすく説明する文章になっているかどうか評価するためには、ノンフィクションの本にもっと興味を持ち、読み比べていくことが必要だと感じた。
- ・良いノンフィクションの本を子どもたちに手渡すため、「読んでみたい！」と思われる紹介文を書ける様これからも学んでいきたい。